

## 「絵画探偵ハロルド・スミス 消えたフェルメールを探し て」 ★★★

2008（平成20）年11月24日鑑賞  
テアトル梅田>

監督・撮影：レベッカ・ドレイファス  
ハロルド・スミス  
グレッグ・スミス  
マイルス・コナー  
マイケル・サリヴァンディック・エリス  
キャサリン・ウェーバー  
2005年・アメリカ映画・83分  
配給/アップリンク

### <原題は？その意味は？>

この映画の邦題はそれだけで映画の内容がわかってしまう親切なものだが、原題は『STOLEN』。つまり「盗まれた」というだけのシンプルなもの。しかし、一体何が盗まれたの？

私は全然知らなかったが、この映画が描く有名な「STOLEN」とは、1990年にボストンにあるイザベラ・スチュワート・ガードナー美術館からフェルメールの「合奏」を含む11点の絵画、彫刻、骨董品計13点、すなわちそれはアメリカの美術品盗難史上最高額5億ドル相当（当時）が盗まれたという大事件。フェルメールはレンブラントと並ぶ17世紀オランダの画家だが、43歳で死亡したため遺した作品が少なく、そのため彼の作品は希少価値が高いらしい。『レンブラントの夜警』（07年）によってレンブラントについて（『シネマルーム18』300頁参照）、『真珠の耳飾りの少女』（02年）によってフェルメールについて（『シネマルーム4』270頁参照）、多くの日本人が知るところとなったが、1990年に起きたそんな「STOLEN」によってフェルメールの『合奏』が盗まれたことは、この映画を観るまで私を含めて多くの日本人が知らなかったのでは・・・？

### <ガードナー夫人とは？ガードナー美術館とは？>

この映画は、私が全然知らなかった知識を次々と提供してくれる。その第1が1990年の「STOLEN」だが、第2は1840年にニューヨークに生まれたイザベラ・スチュワート・ガードナーという、アメリカでも有数の美術品蒐集家であって、ガードナー美術館を創設した女性の存在。通常美術館といえば公的なものだが、ガードナー美術館は完全にガードナー氏個人のものらしい。つまり、ガードナー夫人が自分の鑑識眼で選び集めた美術品を、自分のやりたいように展示している美術館。したがって、1～3階は美術館で、4階にガードナー夫人の部屋があり、1924年に84歳で死亡するまでここで過ごしていたから、まさに「職住一体」の私的美術館。

ところが、そこに展示されているイタリア・ルネッサンス絵画のコレクションはすばらしいものばかりで、フェルメールの『合奏』もその1つだった。映画冒頭に提示されるガードナー夫人の遺言によれば、「すべての作品は現状のまま保存せよ」とのことだから、美術品の配置換えも新作の導入もできないわけだ。そして、盗まれた作品は額だけを残してご主人様のお帰りを待っているわけだが、さてそんな遺言の実効性はいつまで続くの？

### <絵画探偵ハロルド・スミスとは？>

この映画から得られる知識の第3は、ハロルド・スミスという実在の「絵画探偵」の存在。私は損保会社の顧問弁護士をしているから、保険事故が発生した場合に損害の査定をする「アジャスター」という職業の人たちと日常的に接しているが、このハロルド・スミスがそれ。彼の専門は美術品や宝石らしいから、今人気のTV番組『開運！なんでも鑑定団』の中島誠之助氏のようなもの・・・？もっとも、ハロルド・スミスは単に盗まれた美術品の査定をするだけでなく、その返還請求について保険会社の依頼を受けて私立探偵の仕事をするらしいから、まさに「絵画探偵」とは言い得て妙！

ビックリするのは、その風貌。チラシには右目にアイパッチをし、フェドーラ帽を被り、スーツ・ネクタイに身を包んだ老紳士が写っている。なぜ、そんな奇妙な格好を？こりゃ自分の職業を目立たせるための一種の仕掛け？一瞬私はそんな解釈をしたのだが、それは大まちがひ。彼は若い頃から皮膚ガンに冒され、顔や鼻にもその影響が出たため、やむなくそんな格好をしていることが判明。そして、2005年2月19日皮膚ガンとの闘いの末、他界したとのことだ。合掌。

### <なぜ、レベッカ・ドレイファス監督がこんなチャレンジを？>

1990年のアメリカ史上最大の美術品盗難事件にレベッカ・ドレイファスという女性監督が興味を示したのは、彼女自身が少女の頃にガードナー美術館にある『合奏』の美しさに魅了されていたため。その結果、この事件がボストン警察やFBIの懸命の捜査にもかかわらず、10年以上経っても一向に進展が見られないことに業を煮やした彼女は、自分でこの「STOLEN」事件を追跡する映画をつくることを決意したというわけだ。つまり、ガードナー美術館はガードナー夫人の個人的趣味で完成させた美術館だが、この映画も、レベッカ・ドレイファス監督の個人的な趣味で完成させた映画・・・？

### <前科者らが次々と>

この映画はレベッカ・ドレイファス監督の企画に、ハロルド・スミスが乗ったことによるホンモノの「STOLEN」事件の追跡映画。したがってプレスシートにはホンモノのFBIの手配書が載っているからビックリ。それも異例だが、前科者らが次々とスクリーン上のインタビューに登場してくるのも異例。

その代表的な人物がボストン全域に影響を持つアイリッシュマフィアのボスで、1999年に18件の殺人や、多数の疑惑によりFBIに指名手配されているというホワイティ・バルジャー。第2は美術品大泥棒のマイルス・コナー。ガードナー美術館の盗難はコナーの関係者が関わっていると推測されているが、そのうちの2人は既に死亡しているとのことだからかなり物騒な話。第3は骨董商で前科者のウィリアム・ヤングワース。彼はコナーの所持品を大量に売却し大金をせしめたため、今ではコナーが必死で彼を捜し回っているらしい。そして第4はハロルドの追跡に協力するポール・“ターボ”・ヘンドリー。彼は元美術品泥棒だったが、息子の誕生をきっかけに犯罪稼業から足を洗い警察の情報提供者になったとのこと。そして彼は、犯罪側と司法当局の双方から信頼されているらしい。

前述のとおりハロルド・スミスが2005年2月19日死亡したこともあって、レベッカ・ドレイファス監督のこの映画による「STOLEN」事件の追跡は中途半端に終わっているが、このように前科者が続々と登場してくることにビックリ！

### <「追跡」の到達点は？>

現在ガードナー美術館は500万ドルの懸賞金を賭けて『合奏』を含む13作の盗難美術品の行方を追っているが、この映画による追跡の結果その到達点は？それは、ボストンはアイルランド系移民の多い町であることもあり、IRA（アイルランド共和軍）が絡んでいるのでは？ということだが、この映画を観ている限りそれはまだまだ根拠不十分。その意味ではこの映画の完成と公開は中途半端かもしれないが、逆によくここまで追跡したもの、と褒めてもいいのでは・・・。